

7月11日「どう生きるか？」使徒言行録19：11～20

今日は一緒に使徒言行録から御言葉を聴きました。神さまはパウロを通して、ユダヤを超えてローマ帝国の隅々にイエス様のことを伝えられました。イエス様はご存じの通り病気の人を癒したり、悪霊を追い出したりされましたが、パウロも同じ賜物を与えられて身に着けていた手ぬぐいやエプロンで病気を癒したり、悪霊を追い出したりしたようです。当然「凄い！」となってイエス様のことは広まります。ところが、有名になることは良いことばかりではなくて、勝手にその名を利用しようとする輩も出てきたりするわけです。当時のユダヤ教の祭司や祈禱師たちなかにも同じように人々のところを回っていた人たちがいたようなのですが、祭司長スケワという人の7人の息子たちがパウロがイエスの名によって人々の病気を癒すのを見て、真似し始めたんですね。「**パウロが宣べ伝えているイエスによって、お前たちに命じる**」そう言って、悪霊を追い出そうとしたんです。素直な人なんかは「この人はパウロのお弟子さんかな!？」なんて騙されたのかもしれませんが。ここから面白いんですが、人は騙せたかもしれませんが、悪霊の方が本物と偽物を見分けることが出来たと言うんです。「**イエスのことは知っている。パウロのことも良く知っている。だが、いったいお前たちは何者だ!**」そう言って、偽物の祈禱師たちに飛び掛かってめっちゃくちゃ酷い目に合わせました。この話はあっという間に広まってますますイエス様のことは広まっていったのだそうです。

数年前に妹が結婚したのですが、その時に少し口論になったことがありました。妹が結婚する、結婚式はもちろんキリスト教式です、そこまでは「良かったね!祝福するよ～」だったのです。ところが、司式は結婚式場の牧師にしてもらおうと言い出したのです。それに私は猛反対して、言い争いになりました。「父や兄には家族として参列して欲しいし、牧師なんて誰でも一緒でしょ?」妹の言い分です。「あんたそれ確かめたんか?結婚式場の牧師なんてひどいところになるとその辺の外国人が日本語下手なふりしてアルバイトで台本を読んでいるだけやねんで!」妹は「え!? そうなん!? 知らなかった・・・」かなりショックを受けた

様子でした（良心的なところは近隣の教会のきちんとした牧師に依頼されているようです）。結局、私たちが幼少期に過ごした大阪の教会の牧師に司式を依頼することになりました。当初、妹は頼むのが迷惑なのではないかと不安だったようですが、連れ合いと一緒に大阪の教会の礼拝に出席し、その時に結婚するにあたってのカウンセリングを丁寧にしてくださったようで、担ってくださった牧師に感謝していました。式当日も、もちろん適当に言いまわされた台本ではなく、その日のために準備された説教の言葉と、祈りの言葉はとても素晴らしいもので、これが本物だと思いました。

今日の使徒言行録の物語が伝えようとしていることも恐らく一緒に、服装を真似たり、言葉を真似たりすれば、雰囲気は出せるかもしれませんが、知らない人は騙せるかもしれません。でも本質は絶対に真似できないということです。実は、今日の少し前、19章1節以降には洗礼の話が出てきます。パウロがエフェソの街に宣教に出かけると、そこにいた人たちは、ヨハネの罪の悔い改めの洗礼は受けていたけれども、イエスの名による洗礼は受けていませんでした。そこで、パウロはもう一度イエスの名によって洗礼を授けます。そうすると人々は聖霊を受け、神さまの賜物を受けとったと言います。パウロもイエスの名によって人々を癒しました。それは今まで迫害してきたイエスを自らの救い主と告白し、目からうろこが落ちるほど大きな悔い改めを通してパウロが受け取った賜物なのです。それぐらい大切な神さまから与えられた賜物は商売の為に利用したり、簡単にまねできる道具の類ではないのです。神の賜物はそんなに安っぽくはありません。私たちは洗礼を通して、とても大切に、私たちだけの賜物を神さまから与えられているのです。洗礼を受けるということはそれほど大きな恵みがあるのです！

ここで、少し話が変わって、今日の聖書日課では（読んでいませんが）、旧約からエレミヤ書のこんな言葉が選ばれていました。「**主の神殿、主の神殿、主の神殿**という、むなしい言葉に依り頼んではならない。この所で、お前たちの道と行いを正し、お互いの間に正義を行い、寄留の外国

人、孤児、寡婦を虐げず、無実の人の血を流さず、異教の神々に従うことなく、自ら災いを招いてはならない。」エルサレム神殿に参拝のために集まってくる人々にむかって預言者エレミヤは呼びかけるのです！「主の神殿！」という言葉の響きだけに抛り頼んではならない。単に形だけの礼拝をすれば、神さまの御心に沿うというものでもない。道と行いを正し、正義を行い、社会の中の弱い者たちに愛を注ぎ、偶像を拝まない。これこそ、本当の礼拝だ！と。また、招きの言葉として読まれたけれども、福音書からは山上の説教の締めくくりにイエスが語られた言葉が選ばれていました。「そこで、わたしのこれらの言葉を聞いて行う者は皆、岩の上に自分の家を建てた賢い人に似ている。雨が降り、川があふれ、風が吹いてその家を襲っても、倒れなかった。岩を土台としていたからである。」これらの言葉を通して、私たちは考えさせられます。神の言葉に従って自分たちの生き方を根本的に新しいものへと変えられるかどうか、私たちに問われていると。信仰とは、心の中の信心というものに留まらず、自分自身の生き方、自分自身の在り方を、御言葉を聴きながら変革していくものだ。

そういう意味で、今日の聖書で私が面白いなと思ったのはこの言葉でした。「18節 信仰に入った大勢の人が来て、自分たちの悪行をはっきり告白した。」パウロの話聴いて、エフェソ中の人たちにイエスの名が広まった。これは分かります。魔術師たちは魔術書を捨てて、本当に力のあるイエスへの信仰に入ろうとした。これも分かります。でもその前に、既に信仰に入っていた人たちがやって来て、自分たちの悪行を告白し始めたというのです。私たちは洗礼によって、確かに大きな恵みを受けます。凄い賜物を受け取ります。でも、神の恵みというのはサービス券のように一回使い切りで終わりではないのです。何度も何度も私たちに働きかけ続けるのです。だから、私たちは何度も悔い改めの機会が与えられるし、そのたびに神さまに向き合い、自分自身の罪と向き合い、より良い道へと導かれて行きます。

牧師になって改めて考えさせられていることがあって、牧師と言うの

は結局は生き方だということです。神学部を卒業したという学歴が私を牧師にしているわけではありません。教団の試験に受かったという結果が私を牧師にしているわけではありません。神さまに仕え、教会に仕えていくなかで少しずつ、牧師にしてもらっていつていると思うのです。キリスト者であるということも一緒です。100回聖書を読んだから、キリスト者になるということではありません。教会に10年通ったからキリスト者になるってことでもありません。聖書の御言葉に聴き続け、絶えず悔い改めながらイエスの弟子としての歩みをする中で、キリスト者になっていくのです。そうした積み重ねを通して、私たちはすこしずつ本物へとようになっていくのではないのでしょうか。

ちょうど、7月の保育園の聖句は「**勇気を出しなさい**」でした。ヨハネ福音書の十字架にかかる前にイエスが語った最後の説教からです。礼拝で子どもたちに「**勇気が必要なのってどんな時?**」と質問したところ、こんな答えが返ってきました。「**ごめんなさい!**って言う時」なんて素直で、本質に迫る答えかと思いました!自分の過ちを認める、もしかしたら人間にとって最も勇気の必要なことかもしれません。私たちはそのような「ごめんなさい」を神さまに言える恵みを与えられている。私たち人間にとって最も難しく**勇気が必要な「ごめんなさい」**へと導かれている。だから、私たちは絶えず、変わり続けることが出来る。新しくなり続けることが出来るのです。

「そこで、わたしのこれらの言葉を聞いて行う者は皆、岩の上に自分の家を建てた賢い人に似ている。雨が降り、川があふれ、風が吹いてその家を襲っても、倒れなかった。岩を土台としていたからである。」